

校長室だより

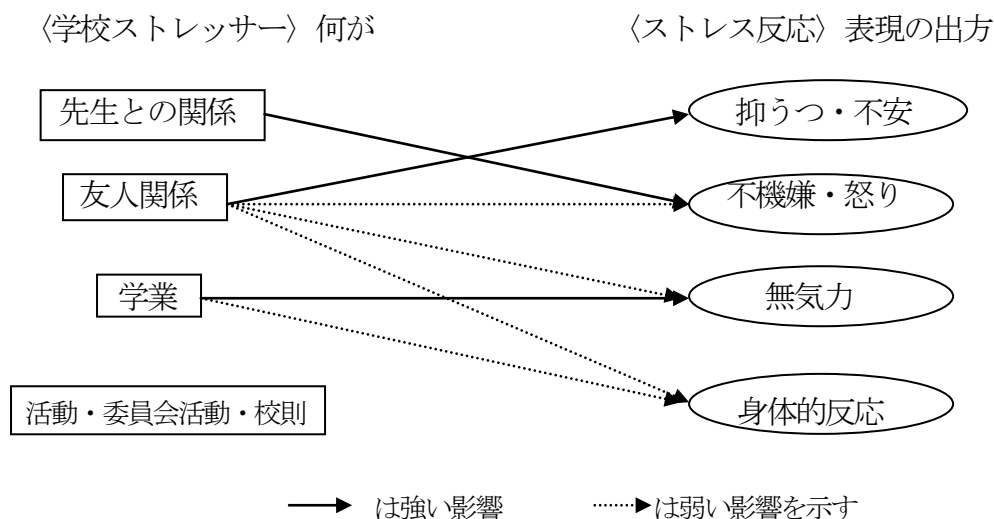
岸和田市立浜小学校

渡瀬 克美

「学校づくりに生かすピア・サポート」について

5月末に校長研修で、奈良教育大学教授の講義「学校づくりに生かすピア・サポート」を聴きました。これは、子育てにも共通する話だと思いましたので、ご紹介します。

まず、**学校ストレスとストレス反応の関係**（学校でストレスを感じるものに対して、どのように反応するかの図式）から見ていきましょう。



上の図を見ると、子どもたちは、先生との関係がうまくいかなくなると、「不機嫌や怒り」となって強く表れる(校内暴力など)。友人関係では、「抑うつや不安」が強く、「不機嫌や怒り」や「無気力」そして「身体的反応」(チックが出たり、腹痛になったりする等)は弱い表れ方をします。学業ではうまくいかなくなると、「無気力」が強く、「身体的反応」が弱く表れるそうです。

つまり子どもにとって一番影響を受けるのは、友達であることが分かります。(ただし、高学年から中学生が対象のデータです)

一方、近年の児童生徒の変化をみると

- ・自分をコントロールできず、規範意識が希薄化・生活習慣の確立が不十分である。
- ・友達や仲間のことで悩む子どもたちが増えている。・人間関係がうまくいかなかったり、不得意であったりする。
- ・自分に自信がある子どもが国際的にみて少ない・学業や将来の生活に対して、無気力であったり不安を感じていたりする。

そこで、『ピア(仲間)』に着目する具体的な理由についてみると

- ・子どもたちは悩みを抱えたり、困ったりしたとき、自分の友達に相談することが最も多いという事実。・小4〜中3までの92.5%の児童生徒が「人の気持ちが分かる人間になりたい」と考えていること。
- ・人は、実際に人を支援する中で成長すること・子どもの傷つきは子どもの中でこそ癒されること、等です。

このようなことから、子ども同士のトラブル対策は、まず、トラブルを起こさない方法を指導し、子どもの力を活用すべきであるのです。

例えば、いじめ問題を取り上げてみると、日本とイギリス、オランダの小学校3・4年生のいじめの発生率比較では3つの国はほとんど変わりません。そして、いじめが一番多い時期はどの国も、小5～中2にかけてです。中2～中3で日本とイギリス、オランダを比べてみると、『やめろよという仲裁者』が最も少ないのが日本です。逆に、見て見ぬふりをする『傍観者』が最も多いのが日本なのです。オランダもイギリスも中3にはいじめは日本と比べてぐんと減ります。それは、ヨーロッパでは既に子ども同士を関わらせる研究が一般的になっているからだそうです。その一つが、

『仲間(ピア=Peer)の心の扉を開ける3つのプロセス(順番)』だそうです。聴いていると、「うんうん、なるほど」って感じで、こういうことまで、研究の対象になっていることに感心することしきりでした。日本でも指導についての研究はあるのですが、発達論との関係で整理され一般化されているところが違います。ではご紹介します。

第1段階 ワンネス (One ness) 響く。相手の身になろうとする。「分かろうとする」

第2段階 ウィネス (We ness) 支える。相手の役に立つことを一緒に考えようとする提案する態度

第3段階 アイネス (I ness) 自分の気持ちと自分の考えを打ち出す。こちらの側の「自己開示」と「自己主張(教師の伝えるべきこと)」を伝える。

例えばAさんの遅刻の場合の正しいサポートの手順。

(One ness) どうしたん?昨夜は寝るのが遅かったん?勉強してたん?

(We ness) そうなんや、勉強してたんや、勉強も大事だけど、10時には寝たほうがいいね。

(I ness) 学校には遅刻しないようにね!

失敗の手順

- ・遅刻したらあかんやろ! (いきなり禁止、怒る、ことの問題点)
 - ・いつも、夜更かしばかりしてるんじゃないのか? 訳、言うてみる!(決めつけ)
 - ・ええっ! 勉強してたってか? ほんまか? (相手を信じない)
- これでは、心を閉ざして、反発してしまう。

次に、コミュニケーショントレーニングの例を紹介します。友達とトラブルを起こさないための

『ステキな頼み方』5つのステップ

(例) 消しゴムを忘れてしまったので、隣の席の友達に消しゴムを貸してほしいと頼みました。

- (1) 相手の名前を呼ぶ。(〇〇さん)
- (2) 相手の都合を聞く(今 いいですか)
- (3) 頼みごとの内容を言う(消しゴム借りたいんだけど)
- (4) 頼みごとの理由を言う。(実は、忘れてきたので)
 - ①相手が「いいよ」と言ってくれました。
 - ②相手に「ごめんね」と言われてしまいました。
- (5) 相手にお礼を言う。(ありがとう)



このようなスキルを子どもたちに伝えてあげることが、トラブルを防ぐことにつながるというのです。納得です。学力保障とともに人との関わり方を指導することも、大切なことですね。

結論は、子どもが何かしている時(指導しなければならぬことであっても)に声をかける場合、まず、「何してるん?」「どうしたん?」と声をかけること。そして、していることを聞いた後に「そうなんや」と共感することで、相手(子ども)が心を開いてくれる。相手の気持ちをきちんと聞いた後で、自分の考えを伝えることが大切である。ということでしょうか。

人間にとって『究極の幸せとは』(大山泰弘 2009)

・人に愛されること。・人に褒められること。・人から必要とされること。人の役に立つこととあります。子どもたちが、相手の気持ち(言い分)を尊重して十分に聴き、「考えて」「行動できる」人間に育ってほしいと願っています。

